

キリスト道講演会（京大会館）（縮小版M案） 生命の泉

1980年6月8日（京大会館）

奥田昌道

小池先生との出逢い 聖霊のバプテスマ 行き詰まりの時の助けの力 サマリヤの女との対話
人生の大事な瞬間 文化文明とは次元がちがう 働くことが祈り 永遠の生命の水 足を洗う
十字架の蔭に泉湧きて 詩篇36篇9節「生命の泉」 我キリストと偕に十字架せられたり 永
遠の生命をいただく

●小池先生との出逢い

皆さんよくいらつしやいました。私は大学では、民法の教授ですけれども、ここでは一人のキリスト者という立場でお話をさせていただきます。

実は昨日6月7日から小池先生をお迎えいたしましたして、鴨川の丸太町の橋の少し北に「大和屋旅館」という非常に古い旅館を借り切りまして、60名ばかりの者が集まって3回の集会をやり、また朝は御所へ行きまして、早天祈祷会をやりました。それからここに臨んできました。

私が先生に出逢いましたのは、今からちょうど20年前になります。1959年11月9日に「楽友会館」という所でエマオ会主催の講演会をいたしました。それまで私は小池先生という方を全然知らなかった。ある方を通して先生のことを聞いて、先生も「京大で話したい」ということを言ってらつしやるということを知りました。11月8日にお会いして、9日に講演会をしていただいた。その時の題が「無的実存」でした。私はそれに触れて、

「これが本当の——宗教と言うなら——宗教だ。これはキリスト教ではない」

と思いました。やはり私がそれまでに接していた、視野の狭い、何か一つの宗教でこれを金科玉条に守って、ことごとくに罪を赦していただいて、「私は一生、罪びとです」と言って頭をうなだれて、そしてまあ何とか大過なくこの世を過ごすといったものではなくて、本当に生命のあふれるような、また自由がありました。何にも囚われておられない。そういう姿に打たれまして、私はそれから小池先生を通して働いておられるキリストのとりこになりました。それから20年です。

●聖霊のバプテスマ

私はその間、いろいろ悩んだことがあります。先生が告白しておられる次元が高すぎて付いて行けないんですね。「もう私はだめではないか」と、何遍思ったか知れない。けれども、



その時に私を支えたのは何かといいますと、先生はいつも

「私は聖霊のバプテスマを受けてからガラツと変わった」

と言われた。聖霊を受けるまでは無教会の信仰だった。一生懸命にまじめに——あの「富める青年」のように、まじめに一回も集会を休まないで、学生時代に藤井武先生の集会に5年通ったと。それから先生が亡くなられてからも、自分で日曜日を守ってずっとやってきた。ところが何か欠けている。

「何だろう？何だろう？と思っている時に、祈りだということに気がついた」

と先生は仰る。それから、1950年11月3日に、九州の手島郁郎という方と祈りの集会をなさった。そこで俄然、聖霊のバプテスマを受けられました。それで使徒たちの次元に目が覚めた。熊本から帰られる汽車の中で、聖書を開くと聖書の文字が躍動しているという。「聖霊、聖霊」というのがボンボン、ボンボン響いてくる。そういうことを告白されました。それから先生を通して不思議なことが起こった。病める人の前で語っていると、いつの間にか病める人が癒されてしまうとか、不思議なことがいろいろ起こった。逆にそのことで、先生を白眼視する人たちが出てきました。「異端である」と。先生はそういう戦いの中を、

「ただ主イエス・キリストのみ。御霊のキリストのみ」

と言って歩んでこられた。私はそれを20年間ずうつと見てきました。

私が行き詰まったり、「もう付いて行けない」と思った時も、いつも私に一つのまだ可能性が残っていた。それは、私も聖霊を受けたら、先生の言ってらっしゃることがわかる。私はまだ聖霊を受けていない。信仰はいただいたけれども、まだ聖霊を受けていない。聖霊をいただいたら、先生の次元がわかると。それだけを一縷の望みにして私は——歯を食いしばってと言いましようかね——来たんです。10年くらいです。1968年くらいでしようか、群馬県鹿沢温泉の山の中の鄙びた旅館ひなで夏の特別集会がございました。その頃から何かしらひとつ吹っ切れるものが出てきた。

「もう、どうでもいいや。私ではないんだ。自分の信仰だとか、自分の立派さだとか、自分の熱心とか、そういうものではない。キリストが本ものならば、私を捕まえて引っくり返りして、御業みわざをなさるはずだ」

と、何かそういうふうな思いが湧いてきまして、その頃から少しずつ、だんだん楽になってきました。1972年から私は京都で小さな集まりを独立で持つことになりました。家内とたった二人でその頃は始めましたけれども、今はたくさんの方が集会に集まっております。大学で「エマ公会」という聖書を読む会を始めましたが、1957年からです。だんだんと時が経つにつれて楽になってきましたし、語るのが楽しいような、そういうことで今日までまいりました。

私は、いつ聖霊を受けたのかわからないんです、実は。先生のように、パウロのようにガラリと変わるとか、そういう体験がないのです。何か知らないけれども、だんだん楽になっ



てきまして、「自分ではない」ということが本当にわかりました。

●行き詰まりの時の助けの力

今から10年前の大学紛争の頃に、私は一時、聖書を読む会をやめたことがある。まともに授業をできない人間が聖書の会なんて開く資格はないと思って、やめたことがある。でも、また再開しました。聖書を喰らうこと、聖書を読むこと、これは私の生命である。どんな出来損ないでも、どんなに人から責められるような無資格者であっても、生きることだけは神さまは赦してください。私にとってこの聖書は、霊の糧である、生命である、そう思いました。

私はしばしば法学とこの信仰というものがどうしたら両立するかと悩みました。非常に日常的な民法という、一番生活に密着しているところをやっています。法律相談もやっています。いろんなところで現実にはぶつかります。そんなところへ、また我々の学問の中へ、直接にこのキリストの福音が入ってくるわけではありません。しかし、私は、人が人であるかぎり、神の言葉によって生きる、神の霊によって生きる、それだけでいいじゃないかと。神さまの霊が、キリストの霊が私を貫いて生かしてください。生きていることがその証である。それでいいんだと。そういう気持ちであります。

正直、行き詰まったり、本当に倒れ伏すようなことになった時、肉体の力の限界を感じたような時、眠る時間がなかったり、講義の準備を午前2時、3時までして、朝一番の講義をしたりとか、そんなこともございました。その前夜に祈祷会をやつてまして、それが終わってから講義の準備をするとか、そんなことでかなりハードなんですけれども。そのたびに私はキリストに祈ります。

「主さま、あなたは私の生命です。あなたは私の力です」

と。そして祈りますと本当に力がくるんですね。ですから、前はこんな講演会というと、足が震えていたんですよ、正直ね。だけど今は、「もうどうにでもなれ」と思っていますので、神さま・キリストがなさってくださいから。

不思議にこの頃、私のような者を通してでも、病んでいる人のために手を置いて祈りますと、癒されるんですね。そういうことが不思議に起こる。私はただキリストの御力が働いてくださるようなという一念をこめて、キリストに祈ります。そうすると、私が手を置いたら、そこが4日も5日も熱いと言う。そして骨の痛みが癒えたとか、の体験なさる方もあったりする。遠隔地で祈つておれば、向こうで病が軽くなったりとか、そんなことがあったりいたします。私は不思議でありませんが、はつきりしていますことは、キリストが私の中に流れこんで、そして御業をなさるということです。この先どういうふうになさつくか知りませんが、楽しみですよ。

キリストは



「無条件でいい。何も条件は要らない」

と仰るんです。そのことをこれからこの「サマリヤの女」との会話のところで皆さんと一緒に味わいたいと思います。「生命の泉」です。

●サマリヤの女との対話

時は今から二千年前、ユダヤの地方の、「サマリヤのスカル」という町に、これから話に出てくる「ヤコブの井戸」があります。二千年前ですけれども、それがビデオテープに撮られて今、皆さんの前に上映されていると思つて、これを読んでください。ヨハネ福音書第4章です。

「さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、

2——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである——

3ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

南のユダヤからガリラヤへ行く。イエスがずっと過ごされたのはガリラヤです。時々、エルサレムへ、ユダヤ地方へ来られたけれども、また帰られた。その途中に、どうしてもサマリヤという真ん中の地方を通らなければならなかった。

4しかし、サマリヤを通らねばならなかった。5それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、

イスラエルでは井戸というのは物凄く大事なものです。砂漠の民ですから井戸をめぐっている争いもありました。井戸は命の源なんです。

シカルというサマリヤの町に来られた。6そこにはヤコブの井戸があつた。

イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。7サマリヤの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリヤの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリヤの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリヤ人とは交際しないからである。

サマリヤ人は紀元前8世紀のバビロン捕囚のときにイスラエルに残った者と、アッシリヤ王が植民として送りこんだ異教徒との混血の子孫です。ユダヤではそういう混血人に対しては「穢れたる民である」と言つて偏見を持っています。交際はしない。ところが、このユダヤ人であるイエスがサマリヤの女に「水を飲ませておくれ」と声をかけられた。手を差し伸べられた。それでこのサマリヤの女はびっくりした。実はこのサマリヤの女は少々身持ちがわるくて、五人の夫がいたけれども、それももうどこへ行っているのかわからない。お昼の12時頃に水を汲みにくるといふのは怠け者なんです。他の皆はもつと朝早く



起きて水を汲んである。それが今頃、一人水汲みにやって来た。そういう身持ちのわるい女に対して、イエスは親しげに「水をくれ」と言われた。それで怪訝^{けげん}に思ったこの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と訝^{いぶか}って言った。

10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」
とんでもないことをこの人は言い出した。

11 女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15 女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

問答がトンチンカンなんです。キリストが仰ったのは、

「霊の水、死んでも死なない永遠の生命の水、霊水をやるよ。この井戸水は、なるほどヤコブもまたその子孫たちもそれで命を養ってきた、大事な井戸だ。命懸けで守るべき井戸だ。しかし、私が与えようとしている水はそれよりもっと素晴らしいんだよ」

と、そう仰ったけれども、この女はわからない。

「渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」

と。これは怠け者の答えですよ。

「もう、苦勞して水を汲みに来なくなつていい。これは助かった。こんないい水をもらったら、自分はもうバンザイだ」

とこの女は言ってます。次元がちがいますから、キリストは

「あんたでは話にならん。夫を呼んできなさい」と言われた。

●人生の大事な瞬間

ここまでのところで非常に大事なことがくみとれると思う。この女の方は、身持ちがわ



るくて怠け者だ。おそらく人々からは爪弾きされ、白眼視されているような人かもしれない。しかも、その人が何の予知もなく、お昼の12時にこの井戸の水を汲みに来た。そこにイエスが旅に疲れて坐っておられた。「水をくれ」と言われた。

ここに全く予期せずして、彼女は実は神さまに出会っているんですね。全く予期せずして、神さまのほうからイエスという方を通して、この女に近づいて来られた。神さまのほうから声をかけて、道を拓かれた。

よく小池先生が仰ったんです、

「人生には大事な瞬間があるよ」

と。先生が講演会をなさったり、集会をなさったりする時に先生は、

「万難を排して来なさい。語るのは自分ではない。自分の中に神さまが働いて皆さんに語りかけられるのだから。神さまが出会おうとして、皆さんをつかもうとしておられるのだから、出てきなさいよ」

と言われる。「一切を棄ておきて」と、よく聖書に出ていますね。弟子たちはキリストに「私に従え」と言われたら、「一切を棄ておきて従えり」という。そういう従い方を先生は求められるんです。私はその気持ちしが本当にわかります。

「物凄い素晴らしいものが今差し出されようとしている。他の何ものにも代えられない。そういう人生の大事な瞬間をつかんだ人は人生の勝利者である」

と、先生は仰いました。

●文化文明とは次元がちがう

この女はキリストに対して、

「あなたは汲む物を持っていません。井戸は深いんですよ。ヤコブよりあなたは偉いんですか？」

と。確かにイエスは見すばらしく見えたのかもしれませんが。イエスといえども、深い井戸につるべもなく、水を汲むことはできないでしょうと。

私はこの問答の中に、この世の文化・文明といったものの一つの徴のようなものを見られます。我々キリスト者に対して、キリストに対して、

「あなたは、こんなことはできないでしょう。あなたは素手でしょう。新幹線を走らせることはできないでしょう」

と。今は文明・文化が物凄く進んでいますから、まずキリスト教といえば、否定してかかります。歴史もその他学問もみなキリスト教に敵対いたします。

「あなたは水を汲む物を持ってないでしょう。こっちのほうが、先祖ヤコブのほうが偉いんですよ。そうじゃないですか？」

と訊いてます。ところが、実はどっこい、キリストはその上手うわてを行かれた。



「なるほど私は今、この井戸の水を汲んであげることにはできない。今、パンをすぐに与えることはできない。今すぐあなたが求めている、この地上で一番欲しいもの、お金あるいはその他いろいろ、それをすぐに魔術師のように差し出すことはできない。けれども、私が与えようとしているものは次元がちがう。この水を飲む人はまた渴く。しかし、私が与える水を飲む人は永遠に渴くことがない。私が与える水はその人の中で湧き出て、永遠の生命に至る水の泉となるんだよ」

と。これがキリストが私たちに差し出してくださっているものです。確かにこの井戸の水なくしては、ヤコブも子孫も羊たちも生きてこれなかった。掛け替えのない大事な水なんです。それをイエス様はなにも否定なさっていない。

「そうだよ。だけど、それだけでは人間はだめなんだ、また渴くんだ。井戸の水はいつか涸れ果てる。あなたの命もいつかは終りがくるんだよ。終りがくる、しかし尊い命です。それを養ってくれるこの水は尊い。その水に養われながら、それを通して、永遠の生命の水を飲まなかったら、この人生は空しい」

と、キリストは言っておられる。

●働くことが祈り

ここを間違わないでほしいんです。よく「宗教」と言いますと、なにか

「宗教は祈り三昧さんまいでこの世のことはどうでもいい」

というふうに、

「もう水を汲みに来なくてもいいように、その渴くことのない水をください」

と、怠け者をつくるように、あるいはこの世の事に全く無関心で、何も積極的なものを持たない。ただ彼岸に憧れてその日を待っている。そういう怠け者を作り出す阿片あへんのように誤解している人があります。そうではない。この生命の水がきたら、本当に積極的にこの地上での仕事に打ち込むことができます。

「何の憂いもなく、明日死ぬ身であっても、私は今日一日の命を神に在って燃焼す

る。そうしたら、それは永遠だ」

と、そういう確信が湧いてくるんです。

私はこのキリストに触れるまでは過去を悔いて、自分がもう嫌でしょうがなかった、悔いばかりで。それから、将来のことを思うと不安ばかり。過去の重荷、嫌さ加減、それから将来の不安、どっちも真っ暗。その二つの真っ暗に包まれると、現在はまだ真っ暗なんです。何でもとことんやらないと気が済まない質だったのかもしれない。

若いときに罪の自覚、それから死の恐れ、この二つですね。そういったものに実はさいなまされていた。それはやがて自分の身体を蝕むしばんで、私は健康もすぐれなかった時期がずっと続きました。そういう谷間に在って、私は1956年に或る兄弟を通してキリストに導



かれ、そして3年後に小池先生に出逢ったという次第なんです。そして、この小池先生はよく、

「祈ることとは何か。働くこと（ラボラーレ）が即ち祈りだよ」

と仰います。祈りとは三昧ではない。いつもキリストに自分自身を投げ入れて、キリストに包まれて、そして地上の一步一步を踏みしめ歩いていく。歩くことが、働くことが祈りなんだよと。今日一日をキリストと一緒に歩く。

「今日、汝、われと共にパラダイスなり」

と、あの十字架上の盗賊に仰った言葉。それが先生の最愛の言葉だそうですが。そのように先生は毎日毎日、キリストと一緒に歩いておられます。

●永遠の生命の水

そういうことで、この永遠の生命の水というのは実は、この文化文明を底から担っているものなんです。花があります。その根っこが地下水に根を張ってそこから水を汲み上げて育っていく。先生は『無者キリスト』で書いておられます。

「宗教は根の世界である。見えない世界である。地下に埋もれていて見えない。これが宗教だ。しかしながら、樹木の幹は道德であり、花や実は芸術であつたり、その他文学、政治、経済、いろんな学問的営み、芸術的営み、それが花咲く。その花咲く樹木が真に健全であるためには、その根が深くなければならない。根は、方向は逆だ。幹は天に向かって伸びていく。根は下に向かっていく。限りなく祈りの世界で神さまに、深淵に入っていく。花開いて、人はその花を見ている。しかし実は根っこが大事だ。この根っこが腐っていると、いつか木は倒れる。」

そういうことを先生は言っておられます。

キリストの霊水をいただいた者が文化文明を支える。それがなければ、その文化文明はどんなに一時的に栄えていまして、必ず滅びていく。そういうことがこの対話で出ていくと思う。また、私たちはどんなに仕事に熱中し、いろんな生きがいを持っていても、フツと空しくなることがありますか。女の方だったら育児に専念している、学者は学問に打ち込んでいる。やっている時は本当に楽しいんですよ、だけど、それが終わったとき、そのときに喜びと共にフツと空しさが出てきたりする。

それからまたそういった営みが毎日毎日延々と続きますと、なにか空しくなる。私は大学の助手の頃に、それを嫌というほど味わった。学生時代におさらばを告げて、研究助手に一人残った。研究室を一ついただいて、日曜日も出てきてずっと朝から晩までやっていました。それを続けていますと、なにかわびしくなってきた。私はその頃は、酒を飲むとか、他の娯楽も何も知らない身でありました。そしてもう本当にわびしくなってきた。

「なんで私はこんなことをしているのだろうか？」



と思った。そういうことで、みんな渴くんです。この世の仕事、この世の生きがい、いろんなことに携わっていますと、いつか渴く。疲れるんです。そんな時に本当に安らぎがほしい、永遠のものがほしい。それをキリストが、

「私がそれを持っている。いや、私の中に神さまが泉して湧いてくださっている。

私から流れていくんだよ」

と。キリストは神さまに完全に明け渡しておられる。だから、キリストが泉になってくださる。それを先生は、「無者^{むしや}」と言っておられる。無私者^{むたくし}、私無きひと。我執の無きひと、無我なるひと。罪無きひと。善も無きひと、無善者。何も無いひと、「神さまだけ」と言っている生きていたひと。この無私者キリストから泉が流れていく。

キリストは、荒野であの試みに遭われたですね。あれは聖霊を受けられてから、荒野に導かれて四十日四十夜、獣だけが住んでいるような所で試みに遭われた。四十日の断食を終えられたとき空腹を覚えられた。飢餓の状態です。その時に試みる者がやってきて、

「あなたが神の子ならば、この石をパンに変えてごらん」

と。有名なところですね。キリストは、

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」

と。飢餓のどん底ですよ。もう少し続けば命はないかもしれない。そういうどん底で、肉体の限界をつぶさに味わわれた。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉、神の言

葉で私は生きている」

神の言葉に霊があります、神の霊がこもっています。神の言葉が霊となつて火花する。その人の中で泉するんです。生命も何もかも全部、キリストは神さまに差し出しておられる。あのゲッセマネを通過して十字架に至るまで完全に、

「父よ、汝の御意^{みこころ}を。あなたの聖意^{みこころ}だけが私の食物です」

と、このあとに出てくる。

「神の御意を為しとげることがわが食物である」

と。その貫きのキリスト。

神さまは我々に生命の水を下さる。この生命の水は、実は創造的な力を与えていきます。万物は神さまの創造に成っているんです、この大自然も。みんな神の作品なんです。実はヤコブよりも、キリストは先におられた。

「アブラハムより我は前^{さき}にあるなり」

と、ヨハネ伝に書いてある。霊なるキリストが神の聖座にいらつしやつた。それが受肉して地にくだって来られた。我々罪びとと関わりを持って、我々を救わんがために、我々を天の生命に満たすためにくだって来られた。



●足を洗う

実は昨日、大和屋旅館での集会で小池先生は「足を洗う」というヨハネ伝のお話をしてくださった。有名なあの最後の晩餐のところで、夕餉ゆうげのあと弟子たちの足を一人一人洗われた。あの時代は裸足はだしで歩いていきますから、足を洗の一番きたない僕しもべの仕事です。奴隷のする仕事をキリストはなさった。手拭いを腰にまとって、盥たらひに水を汲んで、一人一人の足を洗われた。

キリストは馬槽うまぶねに生まれられた、どん底の生まれ方をなさった。そして今、最後にまた奴隷の仕事をなさった。キリストこそは神の僕しもべ、本当に僕の姿です。神さまの僕である方は、人の僕にまたなられた。徹底的などん底の姿になられた。そして足を洗われた。ペテロは

「私は洗ってもらうのは要りません、恐れ多いから」

と。そうするとキリストは、

「もし、私がお前の足を洗わなかったら、お前と私はもう関わりはないよ」と仰った。小池先生は、

「キリストとの関わりはどうしてできるのか。我々が清くなつて、我々がキリストに近づいてできるのか。そうじゃない。キリストが天から降くだつてきて、我々の足の泥んこを洗って、関わってください初めてできたんだ。キリストは足を洗うために、関わりを持つために、この世に降つて来られた。それ以外にキリストの来られた目的はないんだ」

と、言い切られた。これが福音であります。本当にこちらの立派さではない。こちらの善さではない。こちらの立派さで天国へ行けるなら、たくさんの人が天国へ行ってます。「義人なし、一人だになし」の現世にキリストは降つて来てくださった。足を洗ってください。

「足を洗うために来たんだよ、お前は要らんのか!？」

「はい、洗ってください!」

とペテロは本当に平伏してキリストに言いました。そういう関わり方です。

私は小池先生に出会って一番うれいのは何かといいますと、先生は「無条件」と仰った。

「無条件だよ」

と言ってください。そして、

「破れだよ」

と言ってください。

「整ったものはろくなものはない。整ったものは立派に見えるだけだ。しかし、そんなものに生命はない。破れている姿に神の光が宿る。いい恰好そこをしなくていい。でき損そこないのまま、破れたまま、キリストのところへ来なさい」

と、そう言ってください。

これは一番ありがたい。先生は「無」ということを本当に仰いました。無条件でキリス



トが与えようとしてくださったっているものを、無条件で「はいっ」といただく。それだけだと。この女にだって、キリストは何も条件を付けておられない。

「もし、あなたが神の賜物^{たまもの}を知り、また『水を飲ませてください』と言った人が誰であるかを知っているなら、あなたのほうから願い出たことであろう」と。だけれども、

「もし、ここに立っている方がどなたであり、神さまは何を下さろうとしているか、そのことを知ったら、あなたのほうから願い出ただろう。そしたら、その人はあなたに活ける水を与えたよ」

と、それだけです。「願い出たら与えたよ」と言ってくくださる。本当に有り難いですよね。

●十字架の蔭に泉湧きて

これはヤコブの泉を通してのお話ですけれども、本当の霊の泉はどこに湧いているか。それは十字架という場に湧いています。十字架という場がこの泉の湧く場なんです。泉は清いでしょ。人を生かすこのヤコブの井戸も実に清澄な水が滾々^{こんこん}と湧いている。清らかな水、無色透明の水はどこに湧いているか。それはキリストの十字架の場、十字架でもってキリストはご自分を砕かれた。神さまに砕かれた。審^{さば}かれた。私たち人間の罪を背負って、我執を背負って、私の呻きを背負って、十字架で砕かれ給うた。十字架でキリスト自身が砕かれ、私がそこに共に砕かれ、キリストも私もみな無くなった。そこに真清水が湧いた。キリストは復活せしめられて、新しい霊体^{さんぜん}となって甦れ給うた。もはやそこに死もない、悲しみもない、新しい生命が燦然^{さんぜん}と輝いている。復活の朝です。そのキリストが天界に昇られて、弟子たちに

「お前たち、祈っておれ。やがて聖霊、助け主がくだって来る。この助け主が来たならば、お前たちは力を受けて、世の終りまで地の極^{はて}までわが証人^{あかしびと}となる」

と言われた。それが五旬節、ペンテコステ、聖霊降臨節で成就しました。その聖霊が実は泉なんです。泉の水なんです。湧く場は十字架であり、湧いている泉は聖霊だったんです。聖歌（396番）の1節に、

「十字架の蔭に泉湧きて、
いかなる罪もきよめつくす。

おらせ給え、この身を主よ、

十字架の蔭にこそしえまで。」

という歌詞がある。

皆さん、無条件だと言いますと、

「いやあ、私のような汚れた者が」



と仰るかもしれません。そういう「私のような者が」というのが全部、十字架で片付けられているんです。さっきの「足を洗う」という、どろんこを洗ってくださった、それが十字架なんです。十字架の血が一切を清めてしまっている。

「もはや、汝は清し、罪なし。私が一切を片付けた。今は祈っていないさい。聖霊を上げるから。この生命の水を上げるから」

と。これが無条件の恵みです。無条件に受けとる人に無条件に下さる。これが聖霊の水なんです。その聖霊が光を発します。

●詩篇36篇9節「生命の泉」

小池先生が今度、『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻、1980年刊）を出されました。その一節に詩篇36篇というのが選ばれております。この『詩篇珠玉集』は、一番新しい「キリスト新聞」の6月7日号に、神学者の「日本ルーテル神学大学教授、日本聖書協会理事長」の岸千年先生という方が言葉を尽くして激賞しておられます。「こんな素晴らしい詩篇は初めてだ。実に小池先生の特徴が表れている」と。

「日本語で書かれた詩篇研究で、この書物ほど学問的でありつつ、通俗的であり、かつまた魂をゆさぶる感動を与えるものは、他にはないと思う。」（書評「魂をゆさぶる講解」

——詩篇五十篇を選び出し、個性的に楽しく）

という書評の結びで語っていらつしやる、そういう書物ですけれども。その36篇——先生は原典から直接訳しておられる——その中にこういう一節がある。

5(6) エホバよ、あなたの愛憐は天に漲り

あなたの信実まことは雲にまで及ぶ。……

7(8) あなたの愛憐は貴い哉、ああ神よ！

人の子はあなたの翼の陰に寄り添う！

8(9) 彼らは汝が家の脂あぶらで飽き足り、

あなたは汝が愉楽たのしみの流水ながれを彼らに飲ましめ給う。

9(10) そは生命いのちの泉はあなたの許もとにあり、

あなたの光の中でこそ我らは光を見るから。

こんな素晴らしい句があります。この「生命の泉」の中に私たちが浴する道はただ無条件に、己自身をあるがまま、キリストの中に投げ入れる。祈りでもって投げ入れる。それだけだと。これが私が先生から賜った福音です。

●我キリストと偕に十字架せられたり

ガラテヤ書2章20節に、

「我キリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我



が内に在りて生き給うなり」

と。御霊のキリストが私の中に生きてくださっている。そういう現実が必ずやって参ります。私は長いこと悩んできましたから、そしてまた信仰の道に入ってから、

「聖霊がほしい、聖霊がほしい」

と思いながら、十数年悩んできましたから、今はつきりと皆さんどなたにでも証言できます。必ず主は下さる。必ず上から降^{くだ}つてきて貫いてくださる。そして今度は、生命の泉がその人を通して流れていくんです、この泉は、必ず流れていく。パウロは言ってくれた。コリント前書第1章26節から、

「²⁶兄弟よ、召^{めし}を蒙^{こうむ}れる汝^ならを見よ、肉によれる智^{かしこ}き者おおからず、

「肉によれる」というのは「生まれながらの」ということ。

能力^{ちから}ある者おおからず、貴^{とうと}きもの多^{おほく}からず。²⁷されど神は智^{かしこ}き者を辱^{はづか}しめん

とて世の愚^{おろか}なる者を選び、強^{つよ}き者を辱^{はづか}しめんとして弱^{よわ}き者を選び、²⁸有^ある者を

亡^なさんとて世の卑^{いや}しきもの、軽^{かろ}んぜらるる者、すなわち無^なきが如^{ごと}き者を選び

給^{たま}えり。」（コリント前1：26～28）

つまり、この世で見捨てられた者、この世で渴^{かわ}いている者、この世で行き詰^{きつ}まっている者、悲^{かな}しんでいる者、そういう者をキリストは探し求めて出会^あつてくださる。このサマリヤの女は実は渴^{かわ}いていたんですよ、魂^{たま}が。彼女は身持ちもわるかった。だけれども、何か魂^{たま}で求めていた。それを知^しつて、神さまの方から近づ^かいて来てくださった。私はそう思います。

「恵^{さいわい}福^{ふく}なるかな、悲^{かな}しめる者、その人は慰^{なぐさ}められん」

という山上のキリストの言葉があります。この地上で幸福の絶頂にある方、事業が成功して得意満面な方、調子よく行^いっている人はキリストのところに来^きようとはしない。滑^{すべ}つたり転^{ころ}んだり躓^{つまず}いたり、挫折したり、病に倒^{たふ}れたり、命を懸^{けん}けてきたものに裏切^うられたり、何かそういうどこへも持^もつていきようもないような、その悲^{かな}しみと言^いいますか、そんな魂^{たま}に実は「山上の垂^{した}訓^{くん}」のあの言葉が——「垂^{した}訓^{くん}」ではない——キリストの呼^よびかけ（告白）なんです。

「さいわいだよ、お前。私がお前の友ではないか。私はお前と関^{かん}わりを持ちたいんだよ。今、この言葉が聞こえるね」

と、そう言^いつて語^{かた}つてくるのです。だから、本当に人生の谷間^{やま}で聴^きくべき言葉ですね。そしてその時に聴^きいた言葉はいつまでも離^{はな}れないんです。

だから、この神さまは公平な方です。この世で見捨てられた者、この世でうまくいかない者、そういう者にいつも豊かな慰^{なぐさ}めを下^{くだ}さる。

このコリント前書第2章では、この世の智者^{ちじゃ}に対してパウロは開^{ひら}き直^{ただ}っています。自分はコリントへ行くとき、実にアテネで失敗^{しぱい}いたしまして、智者^{ちじゃ}が集^あまっていますアテネでパウロは論陣^{ろんじん}を張^はつたけれども、みな聴^きいてくれなかった。それですっかり自信^{じゆん}を喪^な失^しして、



大阪のような商売の町コリントへ出掛けるとき、もう破れかぶれ、

「キリストだけ。御霊のキリスト、十字架せられ給いしままのキリスト。もうそれ以外何も知らん」

と。これを引つ提げて行つたんです。

「⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力^{ちから}との証明によりたり。⁵これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼^よらん為なり。」（コリント前2・4～5）

はつきりとこの世の文化文明に訣別しました。「神の言と神の力で」と言つて、そしてコリントに教会ができました。だけど、実は「神の智慧は深いんだよ」と、6節から書いてます。

「人はこちらを知らない。しかし、こちらは神さまに知られ、一切を見る光が与えられる。人に知られていないようで、実はその人は神に知られ、神によつて輝いている。倒されぶつ倒されているようで、実は神さまは立たせてくださっている。弱いようで、実は強いんだ、誰よりも強いんだ」

と。そういうことをパウロはコリント書の中で随所に書いてくれています。

●永遠の生命をいただく

ヨハネ伝の、さきほどちよつと申しましたが、7章を見ます。37節から、

「³⁷祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がつて大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。³⁸わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となつて流れ出るようになる。」³⁹イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている『霊』について言われたのである。」（ヨハネ7・37～39）

はつきりといつて、

「その人の中から生ける水の川が豊かに流れ出ていく」

と。キリストは生命の泉でした。みんなにその泉を差し出して、水を飲ましてくださった。

「その水を飲んだ者は死なない。永遠の生命をいただく」

と。本当に死なない。キリストのように羽ばたいて天界に行きます。のみならず、この地上でその人自身が今度は泉とされる。そして、苦しんでいる人や困っている人に流れて行く。本当に流れていくんです。

最後に、ヨハネの黙示録というところにまたこの「泉」のことが出てきますので、最後の世界をヨハネが幻で示されたところですが、21章1節から読んでみます。

「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。²我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許^{もと}をいで、天より降^{くだ}るを見たり。³また大



なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、⁴かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、^{かなしみ}悲歎も^{さけび}号叫も苦痛もなかるべし。前のものの既に過ぎ去りたればなり』⁵かくて御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書き記せ、これらの言は信すべきなり、真なり』⁶また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、^{はじめ}過わり、渇く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。⁷勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。』（黙示録21・1〜7）

こういう終末の世界が描かれています。これは最後の世界ではありませんけれども、実はこういう世界を私たちは味わっています。こういう世界が今、私たちの中に既に泉して湧いています。それがやがてかの日に完成しますけれども。本当にそうなんです。私たちは、地上では戦いがあります、涙があります。苦しみがあります。しかし、その中であつて実にこのキラキラ輝いているものをキリストは下さっています。

私たちは本当に何者でもありません。どの派にも属しません。ただ私たちはこの新約聖書が証言しているこの福音の現実、使徒行伝、そして使徒たちの書簡、そういったところに溢れているこの聖霊の現実。ユダヤ人も異邦人もない、男も女もない、奴隷も自主もない。人はみな神の子だと。神さまは救おうとしてなさっている。そういう尊い器です。この一人ひとりに神さまはキリストという宝を与えようとして呻いておられる。

「御霊言い難き呻きをもて執り成し給うなり」

と。天界のキリストはご自分の霊を聖霊という姿で私たちに送ってくださいました。そのお方が天界のことを教えてくださる。

「御霊をいただいたら、誰にも教えてもらわなくても、御霊自身が教える」

とコリント前書2章に書いてあります。それがパウロが「霊、霊」と言っている、そういった事態なんです。キリストも、

「神は霊だ。礼拝する人も霊と真をもつて拝しなさい。この山でもあの山でもない。エルサレムでもゲリジブの山でもない。」

「霊と真をもつて。あなたがいるお台所が礼拝の場だ。あなたがいる働いている場が礼拝の場だ。そこで『主さまー！』と祈りながら、キリストに全托して、そして歩いていくところ、そこにキリストの御霊が臨み、あなたと一緒に旅してください」

と。こういった現実が、私は本当に正真正銘、皆さんに告白したい現実なんです。時間も参りましたので、これで終わらせていただきます。どうも、有り難うございます。

